

Title	漢詩からみた平安時代初期の庭園 - 特に嵯峨朝を中心として - ( Abstract_要旨 )
Author(s)	廣安, 春華
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2018-11-26
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/doctor.k21430">https://doi.org/10.14989/doctor.k21430</a>
Right	許諾条件により本文は2019-03-01に公開
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	ETD

( 続紙 1 )

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	廣安 春華
論文題目	漢詩からみた平安時代初期の庭園―特に嵯峨朝を中心として―		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本学位申請論文は、平安時代初期、特に嵯峨朝の庭園について、漢詩に表現された庭園関連事項を悉皆的に読解・検討することで個々の庭園の形態と機能の特性を明らかにするとともに、立地と所有者属性による庭園の在り方の差異を論じたものである。</p> <p>序章では、平安時代初期の庭園に関する研究が、限定的な文献資料と発掘調査成果の乏しさゆえに低調であることを述べる。そして、先行研究のレビューを行ったうえで、漢詩の読解・検討を手段としてこの時代の庭園の形態と機能の解明を行うことを研究目的に設定する。文飾や過剰表現に起因する信憑性への懸念から、包括的に検討されることのなかった漢詩を資料とすることについては、各庭園で詠まれた漢詩にはそれぞれの構成・意匠や周辺景観の特性による描写が看取できることを根拠に妥当性を示した。そのうえで、本論文で取り上げる庭園として6か所の離宮または邸宅の庭園を設定し、『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』を中心にこれらの庭園等で詠まれた漢詩を悉皆的に読解・検討するという手法を示す。</p> <p>第一章では、平安時代初期の平安京の自然環境や当時の政治社会状況ならびに離宮・邸宅の在り方を簡略に取り纏め、地理的・時代的背景を概観する。</p> <p>第二章が本論文の枢要をなす。取り上げるのは、神泉苑・冷然院・嵯峨院・河陽離宮（以上：離宮）、淳和院・閑院（以上：邸宅）の庭園である。</p> <p>神泉苑の庭園については28首の漢詩を検討。先行研究においても神泉苑は豊かな湧水に恵まれた水景の卓越性等が指摘されていたが、漢詩ではさらに具体的な庭園の形態と機能が窺えることを指摘する。すなわち、「洞庭（湖）」に擬えられた園池は水清い様子が「池清爲潦収」、水量豊かな布落ちの滝が「落泉瀑布懸飛鵲」と表現されること、「玉樹長堆跨帝園」から樹木の茂った小高い連丘状であったとみられる築山が重陽の節の「登高」の場として機能したこと等である。建物については、その描写等から「水亭」「山亭」「秋蕙楼」「龍池閣」「釣台」の配置に関する知見を示す。さらに、花宴での「雑樹衆花咲且散」等からウメやモモ、ヤマザクラ等の植栽を看取り、キク、タケ等の植栽状況も読み解く。そして、「王母仙園近 竜宮寶殿深」と描写される神泉苑が、題詞に示される「花宴」「重陽節」等の年中行事や臨時の行幸での密宴の場として、他とは一線を画する傑出した離宮庭園であったことを指摘する。</p> <p>冷然院の庭園については6首の漢詩を検討。嵯峨朝期の4首は先行研究の指摘の通り密宴で詠まれたことを確認するとともに、「泉石初看此地奇」「一道長泉曳布開」「鬱茂青松生幽澗」等の表現から、池・瀑布・遣水といった水景に関しては嵯峨朝の</p>			

離宮・邸宅の庭園の中でも抜群の趣向を凝らしたものであり、それゆえにしばしば嵯峨天皇による密宴の場となったとの見解を示す。

嵯峨院の庭園については6首の漢詩を検討。「茲地清閑人事稀」等から閑静で脱俗的環境を、「池際迫涼依竹影」「溪水尋常對簾帷」等から納涼の場としての池や遣水の様子を読み取る。嵯峨院の園池・大沢池が大規模な築堤工事によることは周知であるが、漢詩では人工を感じさせる描写がほぼみられないことから、この離宮ならびに庭園が周辺環境を活かした仙境的空間に擬せられるものであったことを指摘する。

河陽離宮については28首の漢詩を検討。園内景観の表現よりも離宮外部の周辺景観の描写、特に「棹唱全聞辺俗語」「商帆艤早霞」といった淀川近辺での民衆生活を題材にするものが多いことに注目し、河陽離宮は周辺景観を含めて庭園とみなしたものとし、天皇が普段内裏に居たのでは見ることはできない、統治世界の実像を再確認する場であったとの解釈を示す。

淳和皇太弟の邸宅であった淳和院の庭園については9首の漢詩を検討。「尽洗煩襟碧水湾」から青々とした清水を湛える池、「崔嵬載石勢」から陰しい石組などを推定するとともに、「納涼儲貳南池裏」「明月東山看漸出」から淳和院行幸の目的が納涼や観月であったことを示し、「院裡滿茶煙」から喫茶が行われたと推測する。そのうえで、右京の低湿な環境を巧みに利用した仙境のイメージを指摘するとともに、皇太弟邸宅として行幸時の接遇にも配慮していたことを明らかにする。

藤原冬嗣邸であった閑院の庭園については6首の漢詩を検討。池や築山等に関する描写が少ないことを指摘したうえで、「廻塘柳翠」「曲岸松風」といった描写から多彩な植栽を、「池亭」「藥堂」などから天皇の行幸にも対応する臣下邸宅としての整った遊興施設の存在を読み取る。

第三章では、第二章の個別の庭園の検討を基にして、平安京内外のいずれに位置するかという立地の観点、ならびに天皇の庭園か否かという所有者属性の観点から考察を進める。立地の観点では、京内の神泉苑、冷然院、淳和院、閑院の4庭園が地勢や面積といった所与の条件のもと、構成や意匠といった形態面で各々の性格に応じて創意工夫を凝らした独自性を生み出す一方、京外の嵯峨院と河陽離宮の庭園は周辺環境も庭園の構成要素として取り込む意識のもとで立地環境を際立たせる環境依存的な形態を有することを指摘する。また、所有者属性の観点では、天皇の離宮である神泉苑、冷然院、嵯峨院、河陽離宮においては、原則として鑑賞や納涼あるいは詩宴の場等として天皇がその庭園の時間と空間を享受する機能が優先するのに対し、皇太弟の邸宅である淳和院および臣下の邸宅である閑院の庭園では、天皇の行幸に対応する遊興的構成要素の充実を指摘する。

最後に、結章において、上述した各章の成果を取り纏めてその意義を示したうえで、課題と今後の研究の展望を示す。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、平安時代初期の個別の庭園の特色ならびに立地や所有者属性による形態や機能の差異について、対象庭園で詠まれた漢詩の悉皆的な読解と検討を研究手段として論じたものである。漢詩は文飾や過剰表現等の懸念から、庭園史研究の場で包括的に検討対象とされることはなかった。しかし、庭園描写がすべて実景として受け入れられるわけではないとはいえ、個別の庭園に関する描写に明らかな差異が見られる以上、それは各庭園の実情に一定程度即したものであるとの論者の指摘は説得力をもつ。漢詩の悉皆的な読解と検討を基盤に庭園の形態や機能に迫ろうとする、本論文の研究手法面での独自性は高く評価できる。

本論文で中心をなすのは、6庭園について漢詩からのアプローチを試みた第二章で、このうち冷然院、嵯峨院、淳和院、閑院の論考は『日本庭園学会誌』の査読付き論文として掲載、あるいは掲載確定した論文を基に部分的修正を加えたものである。

神泉苑については、池や遣水、瀑布の描写から水景に優れていたことを漢詩からも再確認し、建物に関しては、五行説も援用して「龍池閣」「秋恵楼」が池に近接して東西に対をなして建つという新たな見解を示す。神泉苑は傑出した庭園を有する離宮であり、空海の漢詩からは万物に対する天皇の徳を示す空間との認識があったと解釈する。研究の蓄積が比較的豊富である神泉苑について、漢詩の悉皆的な読解と検討から上記の如き結論を得たことは、平安時代初期庭園史研究に対する新たな貢献と評価できる。

冷然院については、池や遣水、瀑布、石組、釣殿等の水景に関する描写がすべての漢詩の中にあることを明示する。そして、嵯峨朝の漢詩では水景において過剰表現とも取られかねない描写がみられることも含め、この庭園が水景について抜群の意匠をもつものであったと解釈し、その傑出した水景ゆえに嵯峨天皇による密宴の舞台となったとする結論は、先行研究も踏まえた明解な見解と評価できる。

嵯峨院に関する漢詩では、池や遣水、滝等の庭園内部の構成要素だけではなく、周囲を圍繞する山々の情景も詠み込まれているのが特徴で、それらが庭園の重要な構成要素であったことを指摘する。そのうえで、幽閑で脱俗的な環境を園内に響く水音や鳥のさえずりで効果的に表現していることを示す。築堤による園池造成という大土木工事を基盤としながらも、その人工の痕跡を感じさせない仙境的空間性を、漢詩の観点からも嵯峨院庭園の特徴と見なしうるとした結論は肯ぜられる。

河陽離宮に関する漢詩では、淀川等の園外の周辺景観を題材にするものが多いことを指摘する。しかも、描写されるのは静的な自然景観よりはむしろそこで営まれる民衆生活であることに着目し、河陽離宮は周辺景観を含めて庭園とみなし、天皇が普段内裏に居たのでは見ることはできない、自らの統治世界の実像を再確認する場であったとの解釈を示す。これは漢詩の検討からでこそ得られた考察と評価できよう。

淳和院に関する漢詩からは、右京の低湿な環境に立地したことを踏まえ、寂寥感のある閑居的情趣を漂わせていることを確認する。さらに、納涼や観月を目的とする行幸に対応する施設として、水際の立地が推定される主殿の碧波亭や池亭、および喫茶関連施設の存在を指摘する。そして、天皇の行幸を迎えるこれらの接遇施設は皇太弟の邸宅としての特色であると解釈する。庭園内の構成要素や意匠は記録に残されることが少なく、漢詩の分析によってこそ、こうした解釈が可能になったのである。

閑院に関する漢詩では、池や築山等の主要構成要素に関する記述が目立たないことを指摘し、マツやヤナギ等の多彩な植栽や、釣台、池亭、薬堂等の整った遊興施設の存在、ならびにそうした施設での納涼や喫茶、観月、弹琴等の在り様を際立った特徴として読み取る。そして、こうした特徴こそが天皇行幸に当たっての接遇を強く意識した臣下邸宅の庭園たるものの在り方を示すものとする解釈は説得力をもつ。

第二章の成果を受けた第三章において、「立地」の観点からは、平安京内に立地する離宮や邸宅の庭園が、その制約の中でそれぞれに創意工夫をこらした個性的な独自性をもつ形態をとる一方、京外に立地する嵯峨院と河陽離宮の庭園は、周辺環境を景として取り込む環境依存的な形態をとるとの結論を示す。また、「所有者属性」の観点からは、天皇の離宮の庭園では天皇自らの時間と空間の享受が主眼であるのに対し、臣下邸宅の庭園では遊興施設を充実させるなど行幸への対応が意識されていることを指摘する。二つの観点から得られた結論は、漢詩の悉皆的な読解と検討を基に主要な関連詩句を例示しながらの考察であるだけに、説得力をもつ。

結章では本論文の成果の概要を取り纏めたうえで、同時代の他の庭園への目配りの必要性ならびに漢詩を基にした前後の時代の庭園に関する研究の必要性が語られる。

この様に、漢詩の悉皆的な読解と検討を基に、平安時代初期の個々の庭園の特性ならびに「立地」「所有者属性」の観点からの知見を得た本論文は、当該時代の庭園史研究に確実な貢献を果たしているものと評価できる。今後、典拠とした中国詩との関係等をさらに精査することや、漢詩を基にした前後の時代の庭園との比較、ならびに他のアプローチによる同時代庭園との比較を加えることにより、研究のさらなる深化も期待される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成30年8月2日に、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日：                      年                      月                      日以降